ひろば

ミニコミ紙
平成27年11月20日
第96号
発行責任者
飯田恭次
用賀出張所

二子玉川終戦の頃

玉三丁目　山田修一

終戦時十五歳の女学生だった母から聞いた話だ。

実家は農家で玉堤通りの諏訪神社から奥に入った突き当り。進駐軍のジープが入って来たと聞いた私の祖父は、母と学童疎開から帰っていた妹と年若い叔母を屋根裏に隠した。壁の隙間から覗くと進駐軍のジープが庭に入って来た。エゲ〜とか何とか言っていた。初めて見る外人で、教えられていた様な鬼畜米英という顔はしていなかった。

戦後早い時期に二子橋のたもとにセブンマイルホールという進駐軍将校専用のダンスホールが出来た。現在の野村プラウドの場所だ。

出入りできる日本人は、ダンサーだけだったので、詳しく知る者は今はいない。

私の小学校同級生の父親がダンサーだと聞いた覚えはあるが、出入りしていたかどうかは定かでない。

私の集団疎開

瀬田三丁目　間柄良子

東京に大空襲。世田谷も危ないので集団学童疎開する事になり、校長先生の激励を受け味噌パン二ヶ頂き、遠い新潟に出発。五日町。小さな駅に着き魚野川を渡り田んぼ道を進み大きな杉の木のある寺に着いた。

この年は大雪で道の両端に一m積まれていた。食事は雑炊、固い大豆ご飯と芋等。姉は体調を崩し、家に帰ってしまい、私は布団の中で泣いていました。衛生面も大変でした。

八月十五日。先生と、町長の家でラジオを聞き、寺に戻ると、「戦争負けたよ」と寮母さん達が泣いていました。恐い戦争は絶対反対です。

秋に想う 私の戦後70年

玉電の思い出

用賀四丁目　松本俊雄

私が子供の頃の玉電は木造の運転席。乗車口には扉が無く、客室は一段上がって木造りの椅子だった。

用賀と渋谷往復で15円。渋谷までは信号が三軒茶屋、大橋、上通りの三ヶ所しかなく、246号線もバイパス、首都高速もなく道幅も狭かった。

私が玉電をよく利用したのは昭和33年からの高校時代です。渋谷の一つ手前の上通りで降りて通学、35分かかった。一台乗り遅れて自転車で行っても始業時間に間に合ったのを思い出しました。

玉電の最盛期に乗った気がします。

（用賀町会副会長）

上用賀のまちのうつりかわり

上用賀五丁目　柳田一弥

私の幼い頃の上用賀は、辺り一面農地と植木畑でした。植木畑の中道を通り、京西小学校まで通いました。道幅狭く道芝草が生え、冬は乳が霜柱でずぶ濡れでした。私の小学生時代は、戦争の苦い記憶ばかりです。

時がたち、昭和31年に地元有志の方々により、用賀小学校開校。昭和39年には環状8号線開通。首都高、東京インターが出来、車社会の玄関口となりました。

昭和44年に清掃工場が稼動。現在の上用賀は、益々地域社会の重要な拠点として発展。

便利で住みよい環境の大切さを、次世代へと伝えていきたい。（上用賀町会副会長）

戦後70年をランダムに

用賀二丁目　奥山英明

①湯川博士のノーベル賞受賞。日本中が沸騰した。

②プロレス力道山の活躍。テレビが一挙に普及した。

③水泳一五〇〇m自由形の驚異的記録更新に、日本の時計はこわれていると言われた古橋選手。米国でも活躍し、世界を沈黙させた。

④東京オリンピック、マラソン優勝のアベベ、ゴール後「もう一回走ろうか」と言ったという伝説を残した。

戦後七〇年、民主主義の危機を感じる。数百万人の犠牲の上に築かれた日本の民主主義。

子孫のためにも　是非これを守りぬきたい。

木洩れ日

飯田恭次

年三回発行のミニコミ紙『ひろば』も九十六号、間もなく百号を迎えます。世田谷区内で最大の面積、人口を有する用賀出張所管内、この町で生活する皆様の心の広場になればとの願いを基に、昭和、平成の時を経て号を重ねて来ました。

ワープロ、パソコン、Eメール等が活躍する時代に一貫して手書き、これは、初代編集長、故鈴木武一氏（元優文堂書店店主）ほか編集に携わった方々のこだわりと努力によるものです。

さて、昨年の木曽御嶽山の噴火に続き、今年は箱根、浅間、桜島、阿蘇の山々に噴煙が上り、秋には鬼怒川を中心に関東、東北一帯大水害。科学技術が如何に進んでも、自然、大地との共存を忘れてはならないと私たちは教えられました。

年が明けると初詣で、お賽銭片手に、家内安全、商売繁盛、息災延命、進学就職等の願いをする事になりますが『国土安穏、天下泰平、五穀豊穣』と云う祈りも大切にしたいものです。

日本人の平均寿命は男女共、八十歳を超えました。生老病死を説いたお釈迦さまは八十歳、四国お遍路同行二人の空海は六十二歳、浄土宗を広めた法然は七十九歳で、その生涯を終えています。『老いを楽しむ』は私たち一人〜が自ら挑戦する道のりでしょうか。

ひろば　ご感想をお寄せ下さい

												回覧

郷土紹介

大山道のあしあと（九）

平田良孝

時は移り徳川第十一代将軍家斉の頃、天保二年の秋、田原藩三宅家の家臣で画家としても有名な渡辺崋山が従者を連れて、この大山を西へ厚木まで旅をしています。その折の旅日記の中に、当時の街道風景や人々の生活の様子がスケッチを交えて描かれています。

安政元年（一八五四）十二月、大山は出火により宿坊等数多く焼失しました。又、江戸では大老井伊直弼が安政五年（一八五八）日米修好通商条約を締結、攘夷開国両論渦巻く中、同七年三月、桜田門外の変で四十六歳の生涯を終えています。

文久二年（一八六二）生麦事件等が起り、街道の往来安全確保の為、東海道を矢倉沢往還（大山道）に付替えるとの計画が持ち上りますが、具体化しないまま時代は明治維新を迎えます。

慶応四年（一八六七）江戸幕府は第十五代将軍慶喜が大政奉還、江戸は東京となり、新政府による新たな体制作りが始まります。

その一つ、神仏分離令が出て各地に廃仏毀釈が起ります。

大山では明治六年、大山寺本堂が大山阿夫利神社の下社と変り、国学者権田直助が新たに神職に就きました。

大山寺（不動堂）が女坂の途中に再建されたのは、十数年後、明治十八年です。

遠洋漁業の基地 焼津

高橋善弘

私の故郷は静岡県焼津市です。県のほぼ中央、水産の町、鰹鮪遠洋漁業の基地として、昭和三、四十年代には『東洋一の漁港焼津』と呼ばれていました。

生家は、江戸幕末頃より漁業、水産加工業を営み現在に至っています。

・周辺は住居兼水産加工場が建ち並ぶ焼津の中心地です。残念ながら、最近は過疎化進行中の様です。

子供の頃、海、浜辺、堤防あたりが格好の遊び場所でした。また、家業が忙しい時は仕事の手伝いを小学三、三年生の頃からさせられた思い出があります。

わが故郷

駿河湾からの富士の山、海辺、波という自然の風景と、何か水産の町特有の騒々しさや魚の臭いが入り交った町模様とが故郷の思い出です。当時は、こんな焼津が嫌で嫌でなりませんでした。不謹慎ながら、焼津から出たいと子供心に思っていました。

昭和四十八年、東京への憧れから上京、大学、社会人。五十六年より『用賀』に住みお世話になっています。

用賀、用賀の人々が、ふっと故郷焼津を思い出させてくれる今日この頃です。

私にとり故郷とは「離れて居て、改めて思うものなのか」と、こんな心境になってしまいます。

（上用賀町会会計部長）

地域の核に

（仮称）上用賀公園オープンについて

高橋哲也　奥島俊介

7月に衆議院連記者要成所跡地で（仮称）上用賀公園を造る工事が始まりました。

この跡地が民間に売却されれば、最大高さ45mの建物が建てられる可能性がありました。この為周辺住民からこの跡地を国から世田谷区に買い取ってもらい、桜のきれいな広場にできないかという声が上がり、平成19年秋に上用賀町会をはじめ地域住民の後押しもあり、四、五人の有志が集まり、「上用賀四丁目の街づくりを考える会」を作り、七千余名の署名を集め世田谷区議会に陳情書を提出しました。

この広場では子ども達が自由にボールを投げたり蹴ったり、走ったりできることを考えていましたので、署名集めでは地域の幾つかの少年スポーツクラブの協力も得ました。

平成22年9月に世田谷区が公園用地として跡地を取得することが決まり、その後「上用賀四丁目街づくり協議会」や「上用賀公園そだての会」において、どのような公園にするかを話し合ってきました。

活動を始めて8年、ようやく公園が誕生することになりました。公園は来年春に開園予定です。

みんなが楽しく集う地域の核となるような広場になることを願っています。

（上用賀四丁目街づくり協議会会長）

スポット

歳末助け合い
地域支えあい募金運動
11月13日(金)～12月11日(金)

古着・古布の回収（雨天決行）
12月12日(土) AM9:00～11:30
京セラ駐車場（玉川台2-14）
天神公園（上用賀1-8）

次大夫堀公園民家園
『世田谷の酒屋事情』
11月1日(日)～11月1日(祝)
展示解説会や、杉玉づくりの実演と体験。詳細は区報「せたがや」11月15日号

区立郷土資料館
『世田谷の土地』
11月3日(火)～12月6日(日)
近世の村絵図から現代の耕地整理図などを陳列し、失われた世田谷の原風景を知ることができます。
ぜひご覧ください。

あとがき

「戦後」の次に続く言葉は「民主主義」だと思う。

民主主義の大前提は多数決。ばたして、そうだろうか？その結果の責任の所在はいずこに？

昔、QCという概念をよく聞いた。作業現場の小グループで品質管理・作業効率改善を高める活動だ。

皆でアイディアを出し論議を尽し、全員納得の上、作業に当ると好結果が望まれるというものだ。

多数決での意思決定後の足の引っ張り合いはよく見られる。

・時代に合った民主主義の理念と効率的運用を模索する必要がある。（山田）

筆耕・カット　折原